(19)日本国特許庁(JP)　(12)登録実用新案公報(U)　(11)実用新案登録番号
実用新案登録第3185543号
(U3185543)
(45)発行日　平成25年8月22日(2013.8.22)　(24)登録日　平成25年7月31日(2013.7.31)

(51)Int.Cl.　F I
A47J 36/06 (2006.01)　A47J 36/06 D

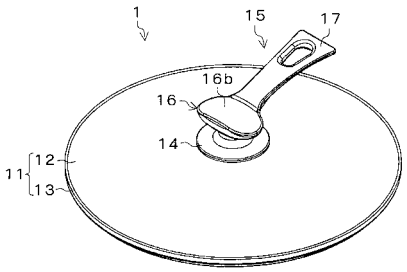
評価書の請求 未請求　請求項の数 2　ＯＬ　（全 7 頁）

(21)出願番号　実願2013-3263(U2013-3263)
(22)出願日　平成25年6月10日(2013.6.10)

(73)実用新案権者　506282517
ル　イシャン
中華人民共和国　チョーチアン　プロビンス　ニンボ　シティ　チアンドン　ディストリクト　バイチャン　イースト　ロード　レーン　ナンバー５１９　ルーム　ナンバー５８
(74)代理人　100104640
弁理士　西村　陽一
(72)考案者　ル　イシャン
中華人民共和国　チョーチアンプロビンス　ニンボ　シティハイシュ　ディストリクト　フチャウ　ストリート　ナンバー１２８　レーン　ナンバー３５　ルーム　ナンバー２０４

(54)【考案の名称】調理容器の蓋

(57)【要約】　（修正有）
【課題】フライパン、鍋等の調理容器を用いて調理をする際に、キッチンのワークトップ上を有効に利用することができる調理容器の蓋を提供する。
【解決手段】フライパンの上面開口を開閉自在に閉塞する蓋本体１１と、この蓋本体の上面に取り付けられた、蓋本体を起立姿勢に支持可能な把手１５とを備えている。把手は、フェノール樹脂等の合成樹脂によって形成されたベース部材１４を介して、蓋本体の本体部１２にねじ止めされており、蓋本体の中心部に固定される固定部１６と、この固定部から蓋本体の周縁部に向かって斜め上方に延びる握り部１７とを有している。固定部の上面には、フライ返し等の調理用具を載置するために窪ませた載置部１６ｂが形成され、調理用具を握り部長手方向に直交する方向に張り出す状態で載置できるように、握り部の長手方向に湾曲させた形状になっている。
【選択図】図１



【実用新案登録請求の範囲】
【請求項１】
調理器具の上面開口を開閉自在に閉塞する蓋本体と、
前記蓋本体の上面に取り付けられた、前記蓋本体を起立姿勢に支持可能な把手と
を備え、
前記把手は、前記蓋本体の中心部に固定される固定部と、前記固定部から前記蓋本体の周縁部に向かって斜め上方に延びる握り部とを有しており、
前記調理容器の上面開口を前記蓋本体によって閉塞した状態における前記固定部の上面には、前記握り部の長手方向に直交する方向に張り出すように、箸、お玉、しゃもじまたはフライ返しといった調理用具を載置するために窪ませた載置部が形成されていることを特徴とする調理容器の蓋。
【請求項２】
前記蓋本体を起立姿勢に保持した状態における前記固定部の上面に、前記調理用具を載置するために窪ませた第２の載置部が形成されている請求項１に記載の調理容器の蓋。
【考案の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
この考案は、フライパン、鍋等の調理容器の蓋に関する。
【背景技術】
【０００２】
例えば、フライパン等の調理容器では、食材を調理するためにフライ返し等の調理用具が使用されると共に、調理した料理がさめないように、蓋を使用するのが一般的であり、蓋と調理用具とはセットで使用されることが多い。
【０００３】
例えば、フライパンの蓋としては、図８に示すようなものが一般的に使用されている。この蓋５０は、同図に示すように、中心部が少し高くなった扁平な円形状の蓋本体５１と、この蓋本体５１の上面中心部に取り付けられた平面円形状の摘み５２とから構成されており、一応調理が終わると、フライパンの上面開口部を蓋５０によって閉塞すると共に、フライ返し等の調理用具を直接ワークトップの上または皿等の上に載せておく。そして、調理物を取り分ける際は、フライパンから蓋を取り外し、図９に示すように、ガスコンロ等の側方に位置しているキッチンのワークトップの上に摘み５２が下になるように上下を逆にした状態で載置した後、フライ返し等の調理用具を用いて調理物を皿等に取り分けることになる。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００４】
【特許文献１】特開２０１２－１９６４１９号公報
【考案の概要】
【考案が解決しようとする課題】
【０００５】
上述したように、フライパンを用いて調理する際は、キッチンのワークトップ上にフライパンの蓋５０及びフライ返し等の調理用具の置き場を確保する必要があり、ワークトップ上を効率よく使用することができないといった問題がある。
【０００６】
さらに、摘み５２が下になるように上下を逆にした状態で、蓋５０をワークトップの上に載置すると、再度、フライパンに蓋をしようとしても、直接摘み５２を摘むことができないので、蓋本体５１の縁を持って反転させた後、摘み５２を摘むことになり、蓋本体５１が熱かったり、汚れていたりする場合、作業性が悪くなるといった問題もある。
【０００７】
そこで、この考案の課題は、フライパン、鍋等の調理容器を用いて調理をする際に、キ

ッチンのワークトップ上を有効に利用することができる調理容器の蓋を提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【０００８】

上記の課題を解決するため、請求項１に係る考案は、調理器具の上面開口を開閉自在に閉塞する蓋本体と、前記蓋本体の上面に取り付けられた、前記蓋本体を起立姿勢に支持可能な把手とを備え、前記把手は、前記蓋本体の中心部に固定される固定部と、前記固定部から前記蓋本体の周縁部に向かって斜め上方に延びる握り部とを有しており、前記調理容器の上面開口を前記蓋本体によって閉塞した状態における前記固定部の上面には、前記握り部の長手方向に直交する方向に張り出すように、箸、お玉、しゃもじまたはフライ返しといった調理用具を載置するために窪ませた載置部が形成されていることを特徴とする調理容器の蓋を提供するものである。

【０００９】

また、請求項２に係る考案は、請求項１に係る考案の調理容器の蓋において、前記蓋本体を起立姿勢に保持した状態における前記固定部の上面に、前記調理用具を載置するために窪ませた第２の載置部が形成されていることを特徴としている。

【考案の効果】

【００１０】

以上のように、請求項１に係る考案の調理容器の蓋は、調理容器から外す際、キッチンのワークトップ上に起立姿勢で載置することができるので、キッチンのワークトップ上におけるそれ自体の置き場の面積を最小限に抑えることができると共に、調理容器に蓋をして箸、お玉、しゃもじまたはフライ返しといった調理用具を使用しない状態では、把手の上面に形成された載置部に、調理用具を載置することができるので、キッチンのワークトップ上に調理用具の置き場を確保する必要がなく、ワークトップの有効利用を図ることができる。

【００１１】

また、キッチンのワークトップ上に起立姿勢で載置すると、摘みが下になるように上下を逆にした状態で載置しなければならない従来の蓋とは異なり、調理容器に再度蓋をする際にも、蓋本体に触れることなく、把手だけを直接握ることができるので、使い勝手がよい。

【００１２】

また、把手は、蓋本体の中心部に固定される固定部と、固定部から蓋本体の周縁部に向かって斜め上方に延びる握り部とを有しているので、起立姿勢に安定した状態で支持することができる。

【００１３】

さらに、調理容器の上面開口を蓋本体によって閉塞した状態における固定部の上面には、握り部の長手方向に直交する方向に張り出すように、調理用具を載置するために窪ませた載置部が形成されているので、載置部に載置されている調理用具を手に取るときに、握り部が邪魔にならず、手に取り易いという効果がある。

【００１４】

また、請求項２に係る考案の調理容器の蓋は、蓋本体を起立姿勢に保持した状態における固定部の上面にも、調理用具を載置するために窪ませた第２の載置部が形成されているので、調理容器から蓋を外した状態で調理用具を使用しない場合には、キッチンのワークトップ上に起立姿勢で載置した蓋の第２の載置部に調理用具を載置することで、キッチンのワークトップ上に調理用具の置き場を確保する必要がなく、ワークトップの有効利用を図りつつ使い勝手を向上させることができる。

【図面の簡単な説明】

【００１５】

【図１】この考案に係る調理容器の蓋の一実施形態であるフライパンの蓋を示す斜視図である。

【図２】同上のフライパンの蓋を示す平面図である。
【図３】同上のフライパンの蓋を示す側面図である。
【図４】同上のフライパンの蓋を異なる方向から視た側面図である。
【図５】図２のＸ－Ｘ線に沿った断面図である。
【図６】同上のフライパンの蓋にフライ返しを載置した状態を示す平面図である。
【図７】同上のフライパンの蓋を起立姿勢で載置した状態を示す断面図である。
【図８】（ａ）従来のフライパンの蓋を示す側面図、（ｂ）は同上のフライパンの蓋を示す平面図である。
【図９】同上のフライパンの蓋を上下逆にして載置した状態を示す側面図である。
【考案を実施するための形態】
【００１６】
以下、実施の形態について図面を参照して説明する。図１～図５は、フライパンの蓋１を示している。この蓋１は、同図に示すように、フライパンの上面開口を開閉自在に閉塞する蓋本体１１と、この蓋本体１１の上面に取り付けられた、蓋本体１１を起立姿勢に支持可能な把手１５とを備えており、フライパンを使用して食材を調理している最中や調理した後に、必要に応じてフライパンに被せて使用するようになっている。
【００１７】
前記蓋本体１１は、強化ガラスによって形成された、中心部が少し高くなった扁平な平面円形状の本体部１２と、この本体部１２の外周縁に装着されたステンレス製のフレーム１３とから構成されており、本体部１２の中心部には、把手１５を固定するためのねじ１８を挿通するねじ挿通孔１２ａが形成されている。
【００１８】
前記把手１５は、フェノール樹脂等の合成樹脂によって形成されたベース部材１４を介して、蓋本体１１の本体部１２にねじ止めされており、蓋本体１１の中心部に固定される固定部１６と、この固定部１６から蓋本体１１の周縁部に向かって斜め上方に延びる握り部１７とを有している。
【００１９】
前記ベース部材１４及び把手１５は、共にフェノール樹脂等の合成樹脂によって形成されており、ベース部材１４には、ねじ１８を挿通するねじ挿通孔１４ａが形成されていると共に、把手１５の固定部１６には、ねじ１８をねじ込むためのねじ孔１６ａが形成されている。
【００２０】
前記把手１５を構成している固定部１６の上面には、箸、お玉、しゃもじまたはフライ返しといった調理用具を載置するために窪ませた載置部１６ｂが形成されており、この載置部１６ｂは、調理用具を握り部１７の長手方向に直交する方向に張り出す状態で載置するように、握り部１７の長手方向に湾曲させている。
【００２１】
従って、この蓋１をフライパンに被せた状態では、図６に示すように、把手１５の固定部１６上面に形成された載置部１６ｂにフライ返し等の調理用具ＣＴを載置することができ、フライパンに被せていた蓋１を外す際は、図７に示すように、蓋本体１１を起立させた状態でキッチンのワークトップ上に載置することができる。
【００２２】
以上のように構成された蓋１は、図７に示すように、フライパンに被せていないときは、蓋本体１１を起立させた状態で載置することができるので、キッチンのワークトップ上におけるそれ自体の置き場の面積を最小限に抑えることができると共に、フライパンに蓋１を被せて、フライ返し等の調理用具ＣＴを使用しない状態では、図６に示すように、把手１５の固定部１６上面に形成された載置部１６ｂに調理用具ＣＴを載置することができるので、キッチンのワークトップ上に調理用具ＣＴの置き場を確保する必要がなく、ワークトップの有効利用を図ることができる。
【００２３】

また、キッチンのワークトップ上に起立姿勢で載置すると、摘みが下になるように上下を逆にした状態で載置しなければならない従来の蓋とは異なり、フライパンに再度蓋をする際にも、蓋本体１１に触れることなく、把手１５の握り部１７だけを直接握ることができるので、使い勝手がよい。

【００２４】

また、このフライパンの蓋１は、把手１５が、蓋本体１１の中心部に固定される固定部１６と、この固定部１６から蓋本体１１の周縁部に向かって斜め上方に延びる握り部１７とを有しているので、蓋本体１１を起立させた状態で安定して支持することができる。

【００２５】

また、把手１５の載置部１６ｂには、調理用具ＣＴを握り部１７の長手方向に直交する方向に張り出す状態で載置するようになっているので、載置部１６ｂに載置されている調理用具ＣＴを手に取るときに、握り部１７が邪魔にならず、手に取り易いという効果がある。

【００２６】

なお、上述した実施形態では、フライパンの上面開口を蓋本体１１によって閉塞した状態における固定部１６の上面に調理用具ＣＴを載置するための載置部１６ｂが形成されているが、さらに、蓋本体１１を起立姿勢に保持した状態における固定部１６の上面にも、調理用具ＣＴを載置するために窪ませた第２の載置部を形成しておくと、フライパンから外した状態で調理用具ＣＴを使用しない場合には、キッチンのワークトップ上に起立姿勢で載置した蓋の第２の載置部に調理用具を載置することで、キッチンのワークトップ上に調理用具の置き場を確保する必要がなく、ワークトップの有効利用を図りつつ使い勝手を向上させることができる。

【００２７】

また、上述した実施形態では、蓋本体１１の中心部に固定される固定部１６から蓋本体１１の周縁部に向かって握り部１７が斜め上方に延びる把手１５を備えた蓋１について説明したが、これに限定されるものではなく、蓋本体の周辺部に固定される固定部から蓋本体の中心部に向かって握り部が延びる把手を採用することも可能である。

【００２８】

また、上述した実施形態では、握り部１７の長手方向に直交する方向に張り出す状態で調理用具ＣＴを載置するようになっているが、これに限定されるものではなく、固定部１６から握り部１７にわたって、把手１５の長手方向に沿って調理用具を載置するようにしてもよい。

【００２９】

また、上述した実施形態では、蓋本体１１が、強化ガラスによって形成された本体部１２と、この本体部１２の外周縁に装着されたステンレス製のフレーム１３とから構成されているが、蓋本体は、こういった構成に限定されるものではなく、全体または一部がアルミニウム、鉄、ステンレス等の金属材料によって形成されていてもよい。

【００３０】

また、上述した実施形態では、フライパンの蓋について説明したが、これに限定されるものではなく、例えば、鍋の蓋にも本発明を適用することができることはいうまでもない。

【産業上の利用可能性】

【００３１】

本考案は、フライパンや鍋等の調理容器の蓋に利用することができる。

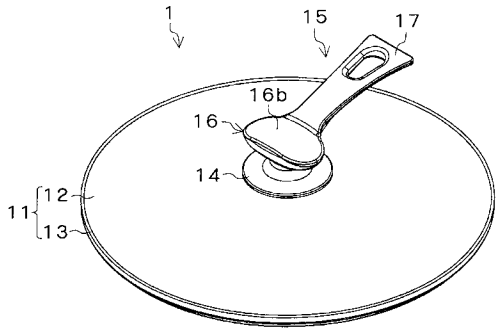
【符号の説明】

【００３２】

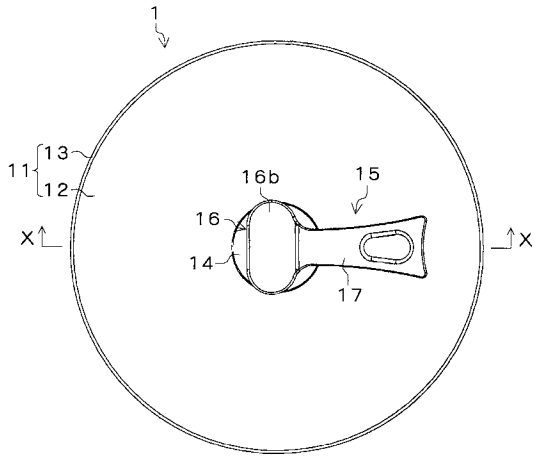
１　フライパンの蓋
１１　蓋本体
１２　本体部
１２ａ　ねじ挿通孔

１３　フレーム
１４　ベース部材
１４ａ　ねじ挿通孔
１５　把手
１６　固定部
１６ａ　ねじ孔
１６ｂ　載置部
１７　握り部
１８　ねじ
ＣＴ　調理用具

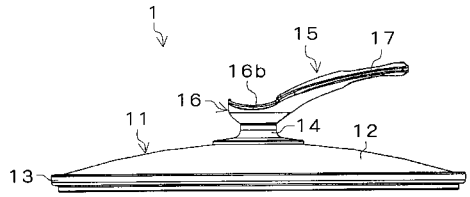
【図１】



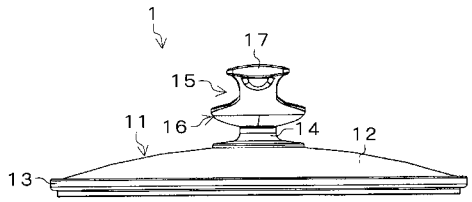
【図２】



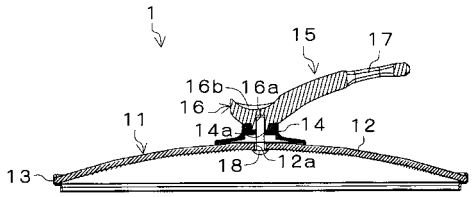
【図３】



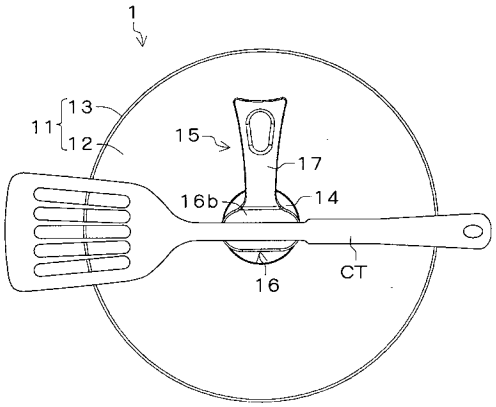
【図４】



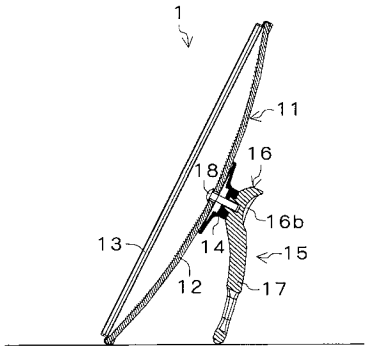
【図５】



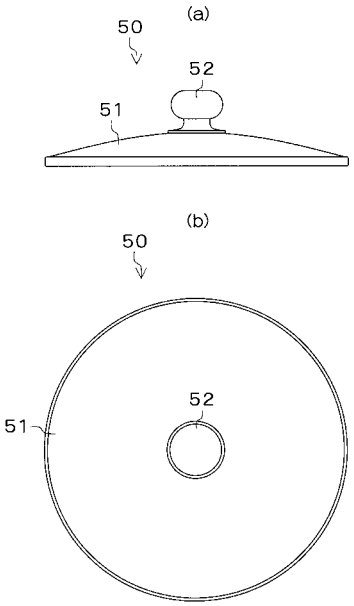
【図６】


1
11
13
12
15
17
16b
14
16
CT

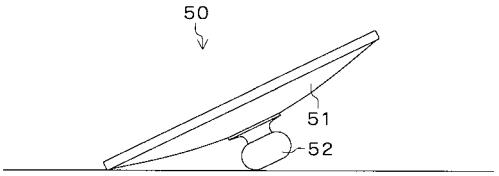
【図７】


1
11
16
18
16b
13
14
15
12
17

【図８】


(a)
50
52
51
(b)
50
52
51

【図９】


50
51
52